

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K01033

研究課題名(和文) 船乗りたちの「語り」から読み解く近世イングランドの海事史研究

研究課題名(英文) The maritime History in early modern England~the analyses of seamen's narrative~

研究代表者

井内 太郎 (INAI, Taro)

広島大学・人間社会科学研究科(文)・教授

研究者番号：50193537

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：(1)船上遺言書の史料論的検討。遺言書には財産の遺贈、船員たちの社会的ネットワークなど重要な情報が溢れていることが明らかになった。(2)16世紀半ばの西アフリカへの航海と船上共同体の実態。本研究では1553～1565年に行われたギニア航海を具体的検討対象とした。大航海時代に船上遺言書の数が増加してくる背景には、死亡率の急増があった。内容の殆どが船内における船員同士の貸借関係に関するものであり、船内では信用経済に基づく活発な経済活動が行われていたことが明らかとなった。(3)以上の検討から、船員たちは遠洋航海が発展する中で、独特のサブカルチャを持つ海事共同体を形成していったことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の学術的意義は、以下の点にある。(1)無数の船乗りのナショナルな物語に回収しきれない多様な姿やアイデンティティを掘り起こし、(2)彼ら独自の会的ネットワーク、心性、文化空間を再構築し、(3)これまで過渡に陸中心的なイメージで叙述されてきた近世イングランドの歴史像について、よりバランスのとれた多様な姿を描くことができた点にある。

また方法論的には、これまであまり注目されてこなかった、船員たちが航海途上で作成した船上遺言書について、厳密な史料論的検討を行った上で検討し、船員たちに語らせることに成功した点は、近年注目されているエゴ・ドキュメント研究の成果としても重要な意義がある。

研究成果の概要(英文)：(1) the historical analysis of seamen's wills.(2) the relation between Guinea trade and the community on shipboard.(3) the economic activity in the ship during the Guinea voyages.(4) the creation of sub-culture in the maritime community

研究分野：人文学

キーワード：海事史 イングランド 船員 語り 遺言書 船上共同体

## 1. 研究開始当初の背景

かつて近世イングランドの「海事史」研究は、もっぱら海軍史、貿易史、航海(地理上の発見)史などを意味し、また著名な航海者や海軍士官、ナショナルなカテゴリーを主語にして行われてきた。そこで本研究は、こうした研究動向を踏まえながら、エリザベス時代の海事史(Maritime History)について、**当時の船乗り(seamen)に関わる史料を読み解き、彼らに語らせながら、従来のように「ナショナルな、そして強いイギリスの英雄的物語」ではなく、そうしたナショナルな物語に回収しきれず、命を落としても誰も記録・記憶にとどめることもない無数の船乗りの多様な姿やアイデンティティを掘り起こし、いわば「不安定で弱いイギリス」の実態を明らかにする。**

## 2. 研究の目的

### (1) 船上遺言書の史料論的意義

当時の船乗りたちの実態を明らかにするには、まず船乗り自身に「語らせてみる」必要がある。そこで、本研究において注目するのが「船上遺言書(the wills on board)」なる史料群である。遺言書には、本人と証人の氏名、死亡日時とその航海地点、財産(賃金、船内の所有物、交易品を含む)の遺贈先、さらにはその間に生じた出来事など重要な情報にあふれている。したがって、これらの遺言書をつなぎ合わせることで、一般船員の視点から、航海の状況、一般の船乗りの活動や海事共同体の実態を再現することが可能となるのである。

### (2) 16世紀半ばの西アフリカのギニアへの航海

もとより、16世紀に作成されたすべての「船上遺言書」を扱うことは不可能である。したがって、本研究では、1553~1565年に9度にわたり行われたギニア航海の途上で作成された「船上遺言書」を基本史料として用いることにする。

### (3) 「船上遺言書」を読み解く

海事共同体に関する「紙媒体」の重要な史料は、いくつか現存しているが、これまで注目されてこなかった遺言書も、価値の高い情報源の1つである。かなりの資産を持つ船乗りは、あらかじめ遺言書を残しておくことが多かったが、**貧しい船乗りであればあるほど、(特に海外進出が進み遠洋航海が行われるようになると、それだけ死亡率が高まり)航海途上で「船上遺言書」を遺すようになった。**たとえば9度のギニア航海にのべ1,000~1,500人が参加したと推定されているが、その間の死者数は300~500名ちかくにのぼった。単純計算で3人に1人が亡くなったことになる。船乗りの死亡原因としては、戦死や海難事故よりも航海上の病死が圧倒的に多かった。船上で病に倒れ、死を覚悟した船乗りが、最後の力を振り絞って何を語るのか。「船上遺言書」は、**船乗りの年齢、識字能力、結婚の有無、家族・親族構成、相続関係、経済状態や人的ネットワーク、彼ら独自の宗教心性、海事共同体の実態を明らかにする格好の素材となりえるのである。**

### 3. 研究の方法

#### (1) 16世紀半ばのギニア航海の実態分析

R.ハクルートが刊行した『主要な航海』(1589年)や当時のギニア航海に関わる航海日誌を分析し、9度に渡るギニア航海の実態を解明する。

#### (2) 船上遺言書の史料論的検討

イギリス公文書館(The National Archives)が所蔵している船員たちの遺言書の検認記録(probation)を収集する。航海ごとに分類し、その内容をデータベース化する。船上遺言書がいかなる過程を経て作成され、どのように保存・記録されたのかを検討する。

#### (3) 船上遺言書の内容の検討

各遺言書の内容について、船乗りの年齢、作成期日、識字能力、結婚の有無、家族・親族構成、相続関係、経済状態や人的ネットワークについて検討する。

これらの研究成果をもとに、エリザベス時代を「黄金時代」、海洋帝国として発展するイギリスの原点として神話化してきた従来の近世イングランドの海事史の相対化を試みる。

### 4. 研究の成果

#### (1) 16世紀後半のギニア航海の実態

R.ハクルートが刊行した『主要な航海』(1589年)や当時のギニア航海に関わる航海日誌を分析しながら、出航・帰航の期日、参加した艦船や船員数、航海ルート、交易地、現地における原住民との金交易、ポルトガルとの抗争などについて明らかにした。

#### (2) 船上遺言書の史料論的検討

9度のギニア航海時に作成され、現存している船上遺言書として93通を確認した。93通は遺言検認記録で確認できるものであるが、その一部はオリジナルの遺言書が残っていることが明らかとなった。また遺言書内の情報(死亡期日や場所、財産目録、遺贈者、人的ネットワーク)についてデータベースを作成した。

#### (3) 船内おる経済活動

上遺言書は、船員のこの世で最後の語りであり、神による救済を求め、財産を遺贈することを主な目的としていた。しかしながら、視点を少しずらしてみると、そこには遠洋航海に参加した船員たちの生き生きとした船上生活や経済活動が描かれていることがわかる。

船内における経済活動は売り掛けによる貸借関係で成立しており、船員たち自身によって形作られ、規則化されていったものと考えられる。こうした経済的依存関係からなる網の目が、船員たちの間に欠くことのできない一体性や協調性に基づく仲間意識を醸成し強化することになったのである。船上遺言書の普及も、それが船員間の貸し借りを相殺する証書のような役割を果たすようになり、船内の信用システムの維持に欠かせないものとなったことを示している。

#### (4) 近世イングランドにおける海事共同体

確かに船員は自律的で自由に遍歴する存在であったが、実際には、海事共同体内における彼らの間の絆は強かった。船員たちは、とくに賃金や食糧問題に関して慣習的な権利が侵されている

と感じた場合、徒党をなして抵抗し、事業主、海軍士官層や国王に対して彼らの力を誇示することができたのである。しかしながら、だからといって彼らは単なる暴徒ではなかった。彼らの抗議の手段は、イングランドの労働文化の中に深く根付いていた伝統的なやり方に基づいており、その目的も秩序の回復やそのための支援を求めるものであり、それが聞き入れられるであろうという確かな期待感が、そこにはあったのである。

対スペイン戦争が勃発すると、エリザベス時代の海事共同体は、多大なる圧力や緊張を経験することになった。このような新たな課題や機会に直面したときでさえ、多くの場合、船員たちは現状維持につとめていた。数世紀にもわたり、船員たちの文化の多くが維持されてきたという事実ひとつをとってみても、こうした慣習の持続性の強さがわかるであろう。

果たして 16 世紀の大航海時代を生きた船員は、「無知で自由奔放」、「無機質」、「非理性的」、「反抗的」で「統治しがたい」人々であったのだろうか？ 船員たちの最後の語りから船員像を構築してみると、船内において互いの信頼関係に基づく生活や経済活動を行い、喜び、嘆き、悲しみ、怒る個性豊かな船員たちの姿が浮き彫りになってくるのである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 井内太郎	4. 巻 316
2. 論文標題 16世紀イングランドの大航海時代と船員の語り~W. ブラウンの船上遺言書を手がかりとして~	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 史学研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 井内太郎	4. 巻 50
2. 論文標題 16世紀後半期イングランドのギニア交易~W. タワソンの「航海日誌」からみる航海・交易・貿易商人社会~	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 西洋史学報	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 井内 太郎	4. 巻 315
2. 論文標題 16世紀イングランドの船員たちと船上文化~かれらの経済活動の分析を中心として~	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 史学研究	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 井内 太郎	4. 巻 312
2. 論文標題 16世紀イングランドの船乗りと海事共同体	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 史学研究	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井内太郎	4. 巻 -
2. 論文標題 イングランド人によるギニア航海と船上遺言書 1553-1563年	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 春田直紀・新井由紀夫編『歴史的世界へのアプローチ』刀水書房	6. 最初と最後の頁 217-232
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井内 太郎	4. 巻 305
2. 論文標題 R.エデンの記述から見る16世紀イングランドにおけるギニア航海像	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 史学研究	6. 最初と最後の頁 161 ~ 180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井内太郎	4. 巻 45
2. 論文標題 船乗りたちの語り見るイングランドのギニア航海1553-1564	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 西洋史学報	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 井内 太郎
2. 発表標題 16世紀後半期イングランドのギニア交易 ~W. タワソンの「航海日誌」からみる航海・交易・貿易商人社会~
3. 学会等名 三田史学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 井内 太郎
2. 発表標題 大航海時代イングランドの船乗りの社会史～その虚像と実像～
3. 学会等名 広島史學研究会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 井内 太郎
2. 発表標題 16世紀イングランドの船員たちと船上文化～かれらの経済活動の分析を中心として～
3. 学会等名 広島西洋史学研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 井内太郎
2. 発表標題 一六世紀イングランドの船乗りと海事共同体 (maritime community)
3. 学会等名 広島史学研究会大会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井内 太郎
2. 発表標題 船員たちの語りから見るギニア航海 1553-1565
3. 学会等名 広島西洋史学研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井内太郎
2. 発表標題 大航海時代における船上遺言書～船乗りの語りとその文化空間～
3. 学会等名 三田史学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井内太郎
2. 発表標題 大航海時代における船上遺言書の史料論的検討
3. 学会等名 西欧中世研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井内太郎
2. 発表標題 船乗りたちの語りからみるギニア航海
3. 学会等名 広島西洋史学研究会大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------